

アテネ文庫「寺田寅彦との対話」を再読して

千葉 明

平成22年10月に久しぶりに弘文社のアテネ文庫の一部が復刻された。もともとアテネ文庫は昭和23年の創刊で、昭和35年迄に301点を刊行して終刊となったが、その中で寺田寅彦について書かれた本には、宇田道隆の「寺田寅彦」と「寺田寅彦との対話」の2冊がある。今回その後者が読み易い版となって復刊されたので、改めてこれを購入して読み返した。すると、前には特に注意をせずに読んでいた所で気を引かれた部分があったので、私がかつて経験した昔話を述べてみたい。

復刻版の「寺田寅彦との対話」の中の「研究生活入門書に」(68頁)に、寅彦の言葉として宇田は次のように書いている。

「高圧線の下に麦がよく成長したとか、船橋発電所まわりで麦作が良いとかいうのは皆宣伝がはいっている。世間とつながった学問はうるさい」

これを読んで私の農業試験場時代の事を思い起こしたのである。

話は50年以上も前にさかのぼる。その頃岩手県南部の胆沢(いさわ)郡若柳村の畑作地帯には小麦が多く栽培されていたが、何故か生育が極めて悪く、小麦の穂が白くなって殆んど稔らない畑もあり、農家の間では大きな問題になっていた。そこで岩手県農業試験場ではその原因を明らかにしようと現地に試験圃場を設け、色々の対策を構じ、また試験圃場も変えてみたりしたが効果は全く認められなかった。

たまたま昭和32年の事であるが、新しく若柳中学校の学校園の中に試験圃場を設けて試験を実施したところ、その試験圃場の丁度真ん中辺りを東西に真直ぐに横切るように、巾2mばかりの道を付けたように、見事に稔った小麦の筋道が現れたのである。

調査に行っていた我々はこれを見て不思議に思いながら誰ともなく空を見上げると、何とその育成の良い小麦の筋道の上を沢山の電線が走っていたのである。これはもしかしたらこの電線の影響で小麦の生育が良くなったのではないか。とすると一つは、冬の間その電線に雪が多く付着して太い雪の塊りを何本も作るのも、これが電線下の積雪を通常と違った状態にし、これが何等かの影響を及ぼしているのではないか。もう一つはこの電線から何か溶けて来て、それが小麦の生育に影響を及ぼしていないだろうかと話し合った。そして早速調査を始め、この電線は電話線で何も被覆していない銅の裸線であること。電線の下部分の土壌は銅含量が高くなっていること、生育の良い小麦の銅含量も高いこと、そして最終的には生育不良だった畑に銅剤(硫酸銅)を施すと、小麦は見事に育つことを明らかにすることが出来た。つまりこの地域の土壌は銅欠乏土壌であることが日本で初めて明らかにされたのである。なお銅は微量元素と言われるだけあって、10アールの畑に硫酸銅をただの4kg程度施すことで小麦の生育は完全に快復したのであった。

この話は銅欠乏土壌の存在と、電線下の小麦の生育のことで土壌肥料学会でも多くの関心が持たれたが、確かに電話線の下にたまたま試験圃場が設けられるという偶然が無かったならば、この小麦の不稔問題の解明には更にかかなりの時間がかかったろうと今でも考えている。

寅彦の言う高圧線下の小麦の生育云々の話は、おそらく電線工事に関わる人がたぶん電磁波の影響か何かと結び付けて流したいいわゆる風評だと思われる。従って私が述べた話とは全然内容が異なるのであるが、たまたま電線下の麦の生育という文から私の昔話を述べた。

(2 0 1 2 . 9 . 2 0)